

## トマス・ド・クインシーと近代化 —『英吉利阿片服用者の告白』を読む—

浜川 仁

### 要旨

トマス・ド・クインシーは*Confessions of an English Opium Eater* —『英吉利阿片服用者の告白』(以下、『告白』)—を1821年9月から10月にかけて『ロンドン・マガジン』に発表した。すぐに大きな話題となったが、今日このジャンルで期待されているようなショッキングな内容は含まれてはなかった。『告白』は言葉使いも丁寧で、育ちがよく垢ぬけていて教養のある読者層にむけて書かれており、いま読むと少しでも醜聞に属すると思えるようなディテールは注意深く避けているようにも見うけられる。小論では、ハンナ・アーレントの思想を始め、今日、政治学や政治思想史の分野で活躍する姜尚中や佐伯啓思などの日本人研究者の知見を援用しつつ、西欧近代国家の起源や特徴についての二つの対立する理論を検討する。

ド・クインシー研究においては、ジョン・バレル (John Barrell) が先鞭をつけたポストコロニアル批評は、経済的・政治的「他者」に焦点を当てる傾向にあるが、そのことを踏まえながら、近代の主体について論じ、これが封建的な、宗教上の個性を失うというトラウマを背負って始めて登場してきたことを論じる。そして、ラカン派の思想家スラヴォイ・ジジェックの思想に依拠しながら、ド・クインシーの「読者」が、じつは〈大文字の他者〉(ラカン)としての大英帝国であることを明らかにし、この強大な権力の前で、いかにド・クインシーが忠実な近代的個人として自分を印象づけようとしていたのかを検証していく。

### 1. はじめに

トマス・ド・クインシーが、*Confessions of an English Opium Eater* —『英吉利阿片服用者の告白』(以下、『告白』)—を『ロンドン・マガジン』に発表したのは、1821年9月から10月にかけてのことであった。ド・クインシーは、それまでも地方雑誌の編集やエッセイの寄稿などの著作活動を行っていたから、当時36歳の彼は、出版業界ではまったくの新参者というわけではなかったが、掲載と同時に話題となり、翌年単行本化されたこの奇妙な作品は「阿片服用者」の名を一躍有名にし、今日にいたるまで彼の代表作である。

「奇妙な…」といったのは、「告白」というスタイルで書くことについて、とうの作者ド・クインシー本人の態度が煮え切らないように見受けられるからである。ここには、たとえば、同じく『告白』を書いてその名を馳せたルソーのような、身も蓋もないほどの歯切れの良さは見受けられない。「わたしはかつて例のなかった、そして今後も模倣するものはないと思う、仕事をくわだてる」とルソーは書き始める。「自分とおなじ人間仲間に、ひとりの人間をその自然のままの真実において見せてやりたい。そして、その人間とい

うのは、わたしである」と。

この率直さに比べると、ド・クインシーの語り口にはプライドの入り混じったぎこちない含羞がんしゅうのようなものが感じられる。まず、ド・クインシーは、一般読者の啓蒙のために書くという。彼によれば、『告白』は「可成りの程度、有益かつ教訓的なもの」(ド・クインシー, 1995, p. 9)になるはずである。そもそも、イギリス人の紳士たるもの、じぶんの過去の過ちや弱点を人前にさらすことなどしない。そんなことができるのは(「告白」など文章にできるのは)、「如何わしい女か山師か詐欺師か、相場がきまっている」(ド・クインシー, 1995, p. 9)。あるいは、フランスの物書きやドイツの中でもフランスかぶれした連中に相違ないと付け加えているところを見ると、彼は反面教師としてまさにルソーをイメージしているのかもしれない。

それでは、ド・クインシーの『告白』には、どんな教訓やメッセージが込められているのだろうか。まず、彼は自分が阿片常用者であったことを率直に認め、これまで自分を縛っていたこの「呪わしき鉄鎖」を「殆どその最後の環に至るまで解き放ち得た」(ド・クインシー, 1995, p. 11)と明言する。だから、彼は自分の書くものが「世の阿片服用者すべてに有益な奉仕が

なし得る」というのである（ド・クインシー、1995、p. 11-12）。そればかりではなく、彼は「一人の医学的実験者として、阿片の歴史にいささかなりと貢献できるのではないかという信念」（ド・クインシー、1995、p. 128）があるともいう。『告白』からうかがい知るところによれば、このころのド・クインシーは自分のことをあと8年半で死んでしまうと思っていたようである。そこで、「もし此の国の医師界の面々が阿片服用者の体内の様子を調査すれば、彼らの学問に何程か寄与することが出来ると考えるなら、一言そう言ってくれればいい。早速、私はこの身体が法的に彼らの物になるよう手続きしよう」という申し出まで行っている（ド・クインシー、1995、p. 132）。

## 2. 「有益かつ教訓的なもの」

しかし、ド・クインシーのこうした自己弁護はさておき、なぜこの自伝が「告白」でなくてはならなかったのかという疑問はこのころ。いったい彼は、何を、そして誰にむかって告白したというのだろうか。まず、「告白」というからには、普通ならば何か人に隠しておきたい過ちや罪などが、その内容となっているはずだと考えるだろう。しかし、ド・クインシーの語ることは、当時のイギリス社会の道德規準を考へても、とくにスキャンダルにあたるとはどうしても思えないのである。思い当たることがあるとすれば、若き日の彼の娼婦アンとの友情にまつわる顛末であろう。

これは『告白』の中でもとりわけ感動的なエピソードである。1803年、17歳だったド・クインシーは、その当時通っていた私立学校の校長が体力づくりのための運動を十分にさせてくれないことを理由に飛び出し、ウエールズ地方をさまよいていたあと、ロンドンへやってきた。オクスフォード通りにたむろしている娼婦たちと顔見知りになったのはこのころで、ある弁護士のところへ、その男性の私生児らしい10歳くらいの女の子と一緒に寝泊まりしていたという。知人に送ってもらった旅費も底をつき、食べ物にもこまるありさまで、胃の痛みのため睡眠をとることすらままならなかった。ある日、特に懇意にしていたアンという同年代の娼婦と歩いていると、ソーホー街のある家の戸口のあたりでいきなり気分が悪くなり倒れてしまった。アンはなげなしの金をはたいてポートワインを買ってきて、このままだと死んでしまうと思っていたド・ク

インシーに飲ませ、親切に介抱してくれた（ド・クインシー、1995、p. 38）。その後、この少女とは生き別れになってしまう……。純粋な友情で結ばれていたとされてはいるが、この二人の関係の親密度や別れの理由などにつき想像をたくましくしないような読者は、おそらく『告白』を途中で放り出してしまうだろう。だとしても、このエピソードにさえもスキャンダラスな性描写と呼べるようなものがほとんど見当たらないことも、また事実なのである。

「醜聞」といえば、別の素材として、ド・クインシーの阿片常用癖のことがあげられるだろう。だが、この時代は、麻薬の常習効果についての知識そのものがかなり不充分だったから、ド・クインシーが冒頭から指摘するように、作家のコールリッジや、奴隷廃止運動を指導したウィリアム・ウィルバーフォースなど、著名人の中にさえ数多くの阿片愛好家がいたという（ド・クインシー、1995、p. 12）。訳者の野島によれば、これら固有名は、1821年の初出のさい雑誌の編集者によって伏せ字にされたが、1856年版ではド・クインシー本人の手で、復元されたようだ（ド・クインシー、1995、p. 422）。また、阿片をアルコールで割った阿片ちんき幾はジンよりも安価であったため、土曜の晩になると一週間の仕事を終えた労働者たちが街でこれを飲み楽しむのは普通のことであった。ド・クインシーも、毎週土曜の晩には阿片を飲んでから街にくりだし、労働者たちに交じって同じ時を過ごしたという。いつも「寛大に受け入れられた」という彼は、「貧乏人たち」と意見を交換しあい、賃金があがったとか、パンやたまねぎやバターの値段が下がりそうだとかいう話に一喜一憂したという（ド・クインシー、1995、p. 74-75）。

どうように、確かにド・クインシーは「阿片服用が官能的快楽」であり、「小生が他の如何なる御仁によっても未だ記録されたためしのない程それに惑溺したこと」を率直に認めてはいるが、肝心の阿片の快楽を心ゆくまで味わったことについてはまったく悪びれたようすはなく、「小生は自分が罪を犯したとは認めていない」とまで言い切っている（ド・クインシー、1995、p. 11）。したがって、セックスのことにしろ、麻薬のことにしろ、今日のわたしたちが告白文学に期待するような赤裸々な描写は、ド・クインシーの『告白』とはほぼ無縁なのである。

### 3. 「慇懃なる読者」

それでも、とにかく『告白』が何かを告白しているとして、ではこの阿片常用者は、誰に向かって話しているのだろうか。『告白』は、「慇懃なる読者よ」という呼びかけから始まる。この「読者」とは、誰だったのか。19世紀のはじめころまで、本は一冊6～10シリングと高価であった。それが、1820年代ごろには大量出版が可能となる。これは一つには、作家が、貴族のパトロンに頼らなくなり、はじめて大衆へメッセージを送ることが可能になったことを意味する (Butler, 1992, p. 179)。字が読めて、ある程度の小遣いさえ手元にあれば、だれでも本を読むことができたのである。

いっぽう、読者人口がいきなり増えたことは、「読者」が生身の人間ひとりびとりに集めたもの、つまり一種の集合概念というばかりではなく、ある抽象的な存在をも獲得したことを意味する。ド・クインシーは、冒頭から終わりまで、何度も「読者」に呼びかけているが、その性別や年齢、職業、身分などを明確にイメージすることは難しい。そのくせド・クインシーは、親しげに呼びかける「読者」の機嫌をうかがい、その前で媚をうり、またうやうやしく判断を仰ぐ。たしかに、近代民主主義をささえる新興の文化的消費者として、「読者」はこのころ嗜好性の面でも、多種多様になってきたから、作家と読者の間の影響を、双方向でとらえる視点は重要であろう。しかし、ことド・クインシーに関する限り、この抽象的で物言わぬ「読者」のほうが、なぜか知性の面でも倫理面でも圧倒的に上であるような印象を受けるのは、啓蒙家を銜うこの作者のポーズからかんがえれば、マゾヒステックに思えるほど奇妙なことだと言わなくてはならない。これと関連して、『告白』の後半部の「阿片の苦痛」について語るところで、ド・クインシーは、読者を「絵描きさん」に見立て、自分の絵を描いてほしいと要望する印象的なくだりがある。ここで、ド・クインシーは、1812年当時の自宅のようすや、書棚やテーブルの描写をしながら、読者に肖像画を思い描いてもらおうというのである。(ド・クインシー, 1995, p. 93)。ここでは、読者のまなざしが、作家に文字通り身体を与えている。

ここで思い出されるのが、英国人作家の告白が、フランス人やドイツ人たちよりも倫理的にはるかに勝っ

ているというド・クインシーの言明である。この作家は、冒頭から、読者とナショナリスティックな共犯関係を前提に告白を始めていた。そこで小論では、この「読者」のことを、ド・クインシー自身がその一部にすぎないような、英国という政治社会的な——フランスの精神分析学者ジャック・ラカンが〈大文字の他者〉と呼ぶところの——象徴秩序のことであると考えていく。すなわち、ド・クインシーは英国のまなざしのもとで告白文を綴るのである。そのように考えるならば、この「告白」に告白するほどの真実がないという問題は、むしろ、柄谷行人にならって逆向きに考え、告白という「制度」こそが、告白の中身(内容)を産み出していくと見ていけばよい。そうすれば、じつはド・クインシーは、英国のまなざしのもとに「告白」することによって、自らを近代国家英国の国民主体として象徴的に登録しようとしていることが理解される。『告白』には、一人の英国人の「国民化」のプロセスが記されており、こうして描かれる自画像は、まなざしを送り続ける彼の母国そのものと重なり合い、彼のテキストと身体には大英帝国の国家経済戦略上の欺瞞と暴力の刻印がくっきりと浮かび上がってくるはずだ。

### 4. ロマン派と帝国主義

ロマン派といえば、よく「革命」と結び付けられて考えられる。イギリス・ロマン派文学の嚆矢としてあげられるのは、おもにウィリアム・ブレイクの『無垢のうた』(*Songs of Innocence*, 1789) か ワーズワスとコールリッジの『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798) の2作品であり、1830年頃までには終わっていたと考えられているから、期間でいうと英国においてロマン派文学が大きく花開いたのは、せいぜい19世紀の最初の30年間である。確かに、その少し前、1770年代には、アメリカ独立戦争が起こっているし、フランスでは啓蒙思想の広まりとともに、第三身分(平民)が「ブルジョア革命」の担い手となり、1789年にバスチーユ監獄が陥落し、封建的な制度と絶対王政(ブルボン王朝)が支えていた「アンシャン・レジーム」(*ancien régime*) が打ち倒された。いっぽう、1780年代から1830年代にかけてのイギリスは、きわめて順調に経済発展を遂げていた。マリリン・バトラーが指摘するように、この時代、英国の貴族階級は農業改革、産業投資、海外貿易、植民地開発などを通して資

産をふやし、安定していたから (Butler, 1992, p. 179)、政治的変革の時期であったというのは、じつは英国にかんする限りあまりあてはまらないのである。

19世紀までの西欧資本主義経済の発展を、社会学者の佐伯啓思は二つの段階に分けて論じている。人類史で、さいしょにさまざまな文明や文化圏を結びつけて、交易を盛んにおこなうようになったのは、じつはヨーロッパ人ではない。イスラムの商人たちが中心となって、インドの商人や中国の役人たちを貿易相手に加え、16世紀ころまでには世界市場のネットワークはすでに築かれていたという。西欧人はこのすでに存在していた国際市場へのいわば「新参者」だったのである。英国は、もともと絹織物のみを輸出していたが、おりからのキャラコ・ブームで貴族やジェントリー層を中心にインドからの綿織物輸入が急増した。事態を憂慮した英国は、17世紀にインドからのキャラコ輸入を禁止し国内産業の保護に努めた。その結果国内の綿産業が飛躍的に充実拡大し、輸出国に転じたという。こうして、二つの「三角貿易」のネットワーク—— (1)新大陸から綿花や砂糖をイギリスへ、イギリスから綿織物や工業製品をアフリカへ、そしてアフリカから奴隷を新大陸へ、(2)イギリスから綿織物をインドへ、インドから阿片を中国へ、中国から茶や漆器をイギリスへ——が可能となり、英国に莫大な富をもたらすようになった (佐伯, 1993, p. 118-20)。

こうして産業を発展させ、国力を増大させていく英国のようすを、帝国主義批判の視点から、中毒者 (ド・クインシー) の身体と結びつけて論じたのが、ジョン・バレル (John Barrell) の *The Infection of Thomas De Quincey* である。バレルは、フロイド派精神分析理論を軸に批評を展開し、幼くしてなくなった妹のエリザベスにたいし、子供の頃のド・クインシーが、彼女を死から救い出すことができなかつた罪の意識と、彼女を性的に脅かし、死にいたらしめたのはじつは自分だつたのではないかという疑惑にさいなまれるようになったと論じる。そこで、乱暴者の兄ウィリアムを象徴的に殺害することによって、愛するエリザベスをよみがえらせようとしたという。バレルによれば、ド・クインシーの作品には、エリザベスとウィリアムを象徴的に代理する人々が数多く登場する。たとえば、ド・クインシーの作品で、兄ウィリアムを象徴するものとして東洋がある。

このことは、彼個人を超えて当時のイギリス全体が抱いていた東洋に対する不安とも深くつながる。エドワード・サイードは、東洋を、ヨーロッパ人が自分達にとっての他者を映し出すスクリーンであると書いたが、そうした自己/他者という二項対立 (オリエンタリズム) に加えて、バレルはさらにモデルとして、this/that/the other を提唱する。ここでは、this が自己を、あるいはその拡張としての英国を、that が近東を、そして the other が極東を表す。ド・クインシーは、近東を自己の味方にするることにより、本当の他者である極東に対抗することができると考えていたというのである。これは「予防接種」の考え方だが、そこにはつねに他者によって汚染される危険がつきまとう。彼の阿片常習も、極東への罪悪感と恐怖という文脈で理解できるとバレルはいう。

バレルのアプローチは、90年代のド・クインシー批評をポストコロニアリズム批判へと方向づけ、ド・クインシーのテキストからは、さまざまなかたちでオリエンタリズムの要素が暴き出されていった。ポストコロニアル批評系のものとしては、たとえば“literature of power” (権力の文学) を論じたチャールズ・ルゼプカ (Charles J. Rzepka) や、*British Romantic Writers and the East* を書いたナイジェル・リースク (Nigel Leask) などの研究があげられるが、これらの研究から浮かび上がってくる阿片常用者のイメージは、ジュリアン・ノース (Julian North) がいうとおり、好戦的なトーリー党シンパであったり、あくなき帝国主義の擁護者であったりと、けっして好ましいものではない (North, 1997, p. 111-12)。もちろん、そのことのみから研究のレベルや偏向性について何がしかの証明できるというわけではないが、こうした搾取されていく東洋との経済関係に焦点を置いた歴史主義的研究には、いつも反権力的で倫理的なモチベーションが見え隠れしているといえる。もっとも、バレルのばあい、この傾向はフロイトの精神分析にアモラルに依拠することによっていくぶん中和されている感じがする。さらに、ド・クインシーの阿片使用を他者による文化的・経済的汚染の危険をとまなう「予防接種」としてとらえるバレルのやり方は、ド・クインシーの『告白』を、急速に変貌しつつあった英国社会への心理的な防衛メカニズムとしてとらえるための新たな道をひらく。ただし、このば

あい畏怖の対象となっているのは、「他者」としての女性や東洋などではなく、〈大文字の他者〉としての英国である。

ド・クインシーは、近代国家英国のまなざしのなかに自分を見出したと述べたが、この近代国民国家は、どのように登場してきたのだろうか。マリリン・バトラーによると、西欧の社会や思想が革命のうねりを経験したのは、1760年～1790年代中期から後期、「新古典主義」の時代のことであった。ヒューマニズム、普遍主義、個人主義など、人間の本性や可能性についてのきわめて楽観的な意匠がこの時代を特徴づけている。これらの革命趣向については、意外なことに新興のブルジョワ階級というよりむしろ、初めのうちは理想に燃えた貴族たちが先導していったようである。英国においてはホイッグ党のリーダーの一人で、英国初の外相となったジェームズ・フォックス（1749-1806）などが、この時代のリベラリズムを代表しているだろう。こうした理想主義は、文学的にみると、主題や場面、スタイルなどにおいてみられた思い切った簡略化や、簡素に生きる人々やバラッドへの興味としても現れた（Butler, 1992, p. 180-82）。こうした普遍的な人間性への手放しの礼賛ぶりには、特筆すべきものがあつたらしい。トクヴィルの『旧体制』を引用しつつ、カール・シュミットは、この時代、1789年の革命がもうすぐそこまでせまっていたというのに、フランスの貴族たちは『天性善なる人間』を夢想し、感動的なまでに有徳な民衆を夢想していたようだ（シュミット, 2006, p. 86）。

社会学者たちが指摘するように、「保守主義」（conservatism）は、封建制の単なる延長としてではなく、むしろこうした急進的革新熱への懐疑や反動として登場したが、これは忘れてはならない事実である。バトラーによれば、1790年～1820年頃にかけて、湖水地方の自然に癒しを見出したワーズワスや、国家の知的エリート層に教会の聖職者と同じ社会的責任を期待したコールリッジ（Butler, 1992, p. 62-63）、桂冠詩人となったサウジーなど、ロマン派第一世代の「湖畔詩人」らが変革に浮かれていた若いころの反省をまじえながら創作活動を展開していた。この頃は、保守論者がヨーロッパ各地で活躍し、王政や伝統のたいせつさ、家族愛、愛国心、信仰心を保つことの重要性を説いていた。フランスではジョゼフ・ド・メーストルが読まれ、英

国では1790年にエドモンド・バーク（1729-1797）が、『フランス革命の省察』（*Reflections on the Revolution in France*）を出版した（Butler, 1992, p. 180; Gaul, 1988, p. 125）。また、コールリッジやド・クインシーが大きな影響を受けたドイツ文学・思想においては、懐古的な中世嗜好がより鮮明で、はるかに保守的で反動的だった。

## 5. 二つの国家観

近代初期にあらわれるこの二つの潮流は、そのまま政治学や社会学にでてくる二つの教科書的な国家観とパラレルにとらえることができる。E・H・カントロヴィッチを引き合いにだしながら、姜尚中は、中世のあいだ、さまざまな民族や文化圏の人びとが法王や皇帝という至高の存在のもとで、「神秘体」ともいえる信者の共同体を形成していたという。いわゆる「キリスト教的国家」（レスプブリカ・クリスティアーナ）がこれにあたる。そのあと、近代に入ってから国家共同体には、次のおおきく二つの根拠づけがなされるようになった。まず、国家の成員を「デーモス」（市民）にとらえ、人々が自発的・主体的に国家との契約関係を結んだと考えていくことがある。「国民とは日々の住民投票に他ならない」といったE・ルナンのことばが、政治に「ロゴス」（理性）の働きをみようとするこの考え方を端的にあらわしているという。

いっぽう、もう一つの根拠づけにおいては、国民と「エトノス」（民族）が同視される。これは、ひとびとの自然的な、血縁や人種、美的感性などによるつながりを重視していくという、「パトス」（感情）と「審美」（文化）に支えられた国家観である。ハンナ・アーレントは、かつて第二次大戦へ向けて、「血の同質性」を根拠に喧伝されたナチス・ドイツの「種族的ナショナリズム」について批判的検証を行ったが（黒宮, 2007, p. 34）、この国家観はこれと同質のメンタリティーから成り立っているといえるかもしれない。全体主義が急激に勢いをましたのは、ひとびとが「見捨てられている状態」（*Verlassenheit*）にあったからであり（姜, 2007, p. 44）、このばらまいた砂粒のように孤独で、いかなる伝統や価値観からも離脱してしまったひとびとこそが、全体主義の畏にやすやすと陥ってしまったとアーレントは分析している。たとえば、花鳥風月という日本「固有」の文化を強調したり、ことさら

「美しい国」を寿ことばいだりすることなどは、この志向をはっきりと表しているが、そこから「郷土排外主義」につきすすんでいく危険性はつねに存在している、と姜は考えているようだ(姜, 2007, p. 134)。こうした民族主義への警戒心は、これまで全体主義批判をつらぬいてきたものと同質であり、日本戦後の民主主義的な歴史観に裏打ちされているといえるだろう。

戦後の日本にかぎらず、20世紀の二つの世界大戦とその後の冷戦という歴史のなかでは、いわゆる「自由主義陣営」が勝利したとされている。そこで、国家主義をめぐる議論のなかでも、いきおい自由民主主義の立場が優勢を占めてきたようである。これは黒宮一太が『ネーションとの再会』で触れていることであるが、ナショナリズム研究の創始者のひとりハンス・コーンによれば、ナショナリズムは「西欧型」(シヴィック・ナショナリズム)と「東欧型」(エスニック・ナショナリズム)に分かれる(コーン・ダイコトミー)。「西欧型」がより先進的で、一定の領域と政府と法の下にあるのにたいし、「東欧型」は神話や民族的理想などにもとづく非合理的で排他的な集団であるとするという(黒宮, 2007, p. 73-74)。「西欧型」は、いっばんに「ネーションを諸個人の自由意志による契約的連帯とみなす」傾向があり、個人の尊厳や自由、平等などを重視するとされる(黒宮, 2007, p. 81)。

また、佐伯啓思によれば「契約上の国家」という思想は、17世紀中期のトーマス・ホッブスから、17世紀後半のジョン・ロックへと受け継がれ、18世紀フランスのルソーによって国家論としての完成をみた。『リヴァイアサン』(1651年)において、ホッブスは「自然状態」の人間たちは自由であるが、けっきょく「万人の万人に対する戦い」が起こってしまうと考えた。そこで、ひとびとは一切の武力をゆだねるといふ「信約」(covenant)を、「主権者」であるところの国家と取り交わし、これと引き換えに互いどうしからたがいの生命と財産を守られ、平和な市民生活を享受しようと欲するようになる(佐伯, 2008, p. 118)。この考えを受け継いだロックは、ホッブスとは少し違って、武力をひとりじめにする国家からじぶんたちを守るために、市民たちが「抵抗権」を留保するとした(佐伯, 2008, p. 118-19)。ルソーもまた、『社会契約論』のなかで新たに思想を展開し、国家は契約によるのだから、あくまで「民主的」でなくてはならないと論じた

(佐伯, 2008, p. 119)。

文化や伝統を重んじる二番目の国家観は、ひとびとの「郷土」(パトリ)との情念的つながりに重点を置くといえる。佐伯によれば、この立場は、18世紀英国におけるデビッド・ヒュームやパークの思想からきていて、「時効の原理」により、征服によってうまれた国家であっても、政権が平和裏に世代から世代へと平和理に受け継がれていくうちに、人民の信頼と支持を獲得するようになり、そこから確かな伝統と正統性が生じてくるとされる(佐伯, 2008, p. 133)。

佐伯は、民主主義と共和主義という国家観は、「対抗」していると同時に、互いに「補完」しあっていると主張し、もしまかりに近代民主主義を多文化主義的に極限までつらぬきとおし、市民たちがおのおのの伝統や文化をばらばらに主張するようになれば、国家にはもはやほんらいの姿で立ちゆくことは不可能であろうという。黒宮もまた、佐伯と同様に、「個人の選択自由」にはおのずから限界があり、ひとは個人を超えた共同体の価値体系のなかに生まれ落ちてくることを忘れてはならないと強調する(黒宮, 2007, p. 104)。

これら二つの国家観をめぐる論争には容易に決着が付きそうもない。おそらく違いは、姜のような左派論者が近代国家を一種の必要悪と考えているのにたいして、佐伯のような保守系論者たちは、近代国家のない社会のほうにより大きな弊害を見ていることにある。ここで興味深く思えるのは、佐伯や黒宮のような論者たちが、民主主義的なシヴィック・ナショナリズムにある種の国家のありかたを見ているのではなく、むしろその不可能性のほうを、危機感とともに示唆していることである。近代国家が民主主義や個人主義を可能にしたのだとすれば、自らが産み出したものに過度にはまり込むことによって、近代国家は滅ぶだろうというわけである。これは、近代のはじめに生きていたド・クインシーのようなロマン派の作家たちが、胸に抱いていた不安感と危機感、そして諦観とおそらく同質のものである。

そして、これは近代初期には、ある程度広く共有されていた感覚で、じつはひとびとは近代がもたらした「自由」を、むしろより恐ろしいある種のアノミー状況としても受け取っていた、といえるのではないだろうか。「保守主義」は、革命へと突き進むひとびとの主知主義や普遍主義に対する懐疑や反動として登場し

た、近代化のもたらす極度の孤独感と不安を抑圧するための「防衛機制」の一種なのである。若きマルクスが描きだしたように、ブルジョワ革命はひとびとを封建的な縛りから自由にし、家柄や血筋、地域、宗教、教育、そして社会的地位や職業などは、個人としての政治的アイデンティティには、少なくとも建前上は直接影響を与えないとされた。しかし、こうして封建的な「神」が消失してしまったいっぽうで、ひとびとは慣れ親しんだ「物語」に代わるものをほんとうには手に入れることはできなかったのである。

## 6. 「石の心持てる冷酷な」

ド・クインシーの作品には、女性や労働者や東洋人といった「他者」がよく登場してくるが、研究者が口をそろえて指摘するのは、「他者」たちへの彼の態度が極めて両義的であるということだ。いっぽうでは、ド・クインシーの人間観は、18世紀後半、理想に燃え、革命を支持した貴族たちがもっていたような、ヒューマニズム、普遍主義、個人主義の精神に満ちている。オクスフォード通りの娼婦アンとの交流についても、若干勇み足のようなではあるが「正直いって、私がいやしくも人間の姿形をしたものに触れ、或いはそれに近づいて、それで自分が汚れると考えるような人間であった例は、生涯を通じて唯の一度もなかったのだ」と言い放っている（ド・クインシー、1995, p. 36）。若き日の、ロンドンでのみなしごや遊女たちとの触れ合いを思い描きつつ、「オックスフォード牛津通りよ、石の心もてる冷酷なみなしご継母よ！孤児たちの嘆きに耳傾け、子供たちの涙を飲み干す者よ」という一節にも、彼のヒューマニズムが切実に感じられる（ド・クインシー、1995, p. 57）。しかし、ここで見落としていけないのは、むしろド・クインシーの同胞意識が、強烈なペシミズムに満ちているという点である。ここで、女性や労働者や東洋人たちは、ド・クインシーにとって「他者」であって、これらのひとたちを、オリエンタリストの羨望と侮蔑をないまぜにして描いていることがわかったとして、それだけでは、もはやことさら強調に値するとはいえないだろう。

ラカン派の思想家スラヴォイ・ジジエクによれば、こうした「他者」はジャック・ラカンの精神分析のなかでは「小文字の他者」としてとらえられ、幼児が母親の身体の一部の同一化したり、鏡に映った自分の姿

に自分にはそなわっていない全体性と統一性を発見して喜んだりするような対象である。この種の「他者」は、自己との類似関係が感情的なベースになっているため「理想自我」（自我イメージ）とも呼ばれている。もともとは前言語的な「想像界」に属しているとされ、子供が言語能力を獲得し、やがて社会の成員として成長していく過程で、異性や、アイドルや、非差別の対象へと重ね合わされ具現化されていく。ド・クインシーの阿片の夢は、ちょうど、この「小文字の他者」のイメージで満ちている。

ところで、近代人の精神構造を分析するなかで、ジジエクが強調するのはむしろ〈大文字の他者〉のまなざしのほうである。このまなざしは、ひとが「理想自我」、すなわち自我イメージを銜うことで、とくに印象づけたい相手から注がれる視線のことである。家族内でいえば、母親が幼児にとって「理想自我」を支える対象として選択されやすいのにたいして、父親のほうは、母親との親密な関係をタブー化する「法」や「言語」、そして「権力」など〈大文字の他者〉の象徴として認識されるという。こうして、父親のイメージは、インセスタブーを犯したさいに、去勢を行う恐怖のエージェントとして幼児の心にきざみつけられることになるが、同時に父親はまた自分が「良い子」であることを特に印象づけたい〈自我理想〉の相手ともなり、彼のまなざしは、学習や訓練を通して子供が社会秩序に適するよう成長するなかでしだいに内面化されていく。こうして内に取り込まれた〈自我理想〉は、やがて「超自我」として本人の考えや行動を規制するようになるだろう。

この「超自我」についてであるが、じつはフロイトは、現実原則に人を適合させ、実生活を規律正しいものにしようという役割にのみ言及することが多かった。ジジエクはむしろ、その復讐とサディズムに満ちた残酷で猥褻な側面のほうを強調する。幼児がはじめ父親に対して抱いていたような抑えたい恐怖心や罪悪感もまた、「超自我」の重要な要素としてこのようにそのまま内面化されてしまうのである。はじめは父親に象徴されていた〈大文字の他者〉のこのまなざしが、〈超自我〉の理不尽な要求として近現代人の欲望を内面からコントロールし、社会人としての〈自我理想〉による縛りをより強化しているとジジエクは考えている（ジジエク、2008, p. 138-40）。『告白』で、ド・ク

インシーが呼びかけつづける「慇懃なる読者」とは、まさにこの「超自我」としての英国なのである。

フランスの被ったような極度の混乱とアノミー状況を、英国はまぬかれることができたが、だからといって近代化そのものをもろく避けて通ることはできなかった。ド・クインシーが残したのは、この現実には起こらなかった「革命」(エディプスコンプレックス)の記録だったともいえる。近代国家というものは、佐伯がいうように、国家との共和的なつながりをもつひとびとが、おのおの「市民」であることを誇りにおもい、みずからがその一部をなすところの共同体に奉仕する心持を涵養することを求める。このことは、他ならぬ国家契約論を産み出した思想家たちが分かち持っていた認識である、と佐伯はのべる。たとえば、ホッブスによれば、ひとびとが国家と「信約」をかわすのは、「自然法」である「神の法」にしたがうからだというが、これは超越的な存在に忠誠を誓うということでもある。ルソーもまた、民主的国家(統治者)はひとびとの「一般意思」である「共通の何か」を保持していると考えていたという。たんなる多数派の「全体意思」とは異なり、「一般意思」があってはじめて市民は平和で安全な生活を享受しているのだから、統治者が「国家のために死ぬ」というとき、いかなる市民といえども意を決して潔くその命を犠牲に供さなくてはならないという(佐伯, 2008, p. 146)。

すなわち、より根源的にいって、これら国家契約の思想が想定しているのは、国家の前では、すべての市民が他の幾百万、幾千万という同胞と少しも変わらない、入れ替え可能な個人であるという恐るべき還元式なのである。この意味では、これまでリベラルな知識人たちが標榜してきた個人主義や民主主義は、凡百の全体主義などよりも、より深いトラウマをわたしたちの心に刻んできたのかもしれない。ド・クインシーの中では、この事実は、一連の悪夢として執拗に繰り返された。

今や揺れ動く大海原の水の面に、人間の顔が現れ始めたのだ。海は天を仰ぎ見る無数の人面でびっしりと敷き詰められているかと思えた。哀訴する顔、憤怒の顔、絶望の顔、顔、顔、顔が、幾千、幾万という人面が、幾代、幾世紀にも互る人々の顔が、波濤に浮かんで打ち寄せて来た

のである——私の動揺は限りなかった——私の心も大海原と共に——激しく揺れ、波打った(ド・クインシー, 1995, p. 110)

このような、カントならば「崇高」(sublime)ということばで形容したであろう圧倒的な孤独感は、ド・クインシーの著作全体をつらぬいている。J・ヒリス・ミラーは、*The Disappearance of God* (1963年)においてすでにこのことに注意を促し、ド・クインシーが幼いころ姉の死とともに失われた至福を回復するため、ロマン派の感性と表現を駆使しつつ、限りない時間と空間のなかに一人とり残された孤独を描いているといった。この永遠の孤独こそが、ド・クインシーが近代に生きる自分のありさまをかりうじて伝えることばなのだろう。

興味深いのは、ド・クインシーが精神的な拠りどころをワーズワスのように自然にではなく、「人工の楽園」を約束する阿片というモノに求めたことである。ド・クインシーは『告白』のなかで、「この物語の真の主人公は、阿片服用者ではなく、阿片そのものである。それこそ読者の関心が巡る真の中心なのだ」と言い切っている(ド・クインシー, 1995, p. 117)。さらに、「嗚呼! 公正、靈妙、偉大なる阿片よ!」「汝、楽園の鍵もてる者よ」(ド・クインシー, 1995, p. 77)などと呼びかけるくだりを読むと、マルクスが『資本論』の「価値形態論」の最後に展開する「商品物神」(commodity fetishism)のことを思い起こさずにはいられない。なかでも、どの品物とも交換できる特別な「商品」としての貨幣は、わたしたちの欲望の特権的な担い手である。そして、貨幣がそうであるように、阿片もまた、世にもまれな快樂を与えることもあれば、戦慄の悪夢にド・クインシーを放り込んでしまうこともあるという、きわめて両価性の高いモノといえるだろう。

しかし、前述のような悪夢にまつわるくんだりから、ド・クインシーの帝国主義者としての無意識の罪悪感のようなものだけを読み取ることで事足りるとしてはならない。女性や東洋への差別的言説も、夢のなかで「他者」から反対にこらしめられるという描写も、〈大文字の他者〉としての大英帝国への献身の表明なのである。この猥褻な「超自我」のまなざしがあるからこそ、「他者」である女性や東洋を攻撃したり、また反



撃にあったりという象徴的パフォーマンスを反復しなくてはならない。すべては、近代人として国家へ忠誠を表明するためである。したがって、ド・クインシーのいっけん豊かなヒューマニズムにもかかわらず——あるいは、サイドにならって「だからこそ」というべきか——ド・クインシーのことは「石の心もてる冷酷な継母」への本格的な批判に昇華することはけっしてありえない。英国というこの「冷酷な継母」の崇高なまなざしのもとでは、彼にはもっとも愛する女性たちの魂をすら救いだすことはならず、ただこの冷酷な象徴秩序から彼女たちが死によって早期撤退することを願うことしかできない。

以下は生き別れになったアンへの鎮魂の思いをつづつた『告白』のなかでも、もっとも感動的であると同時に、もっとも陰惨な一節である。

あ あ  
嗚呼！ うら若き恩人よ！ 後年、幾度あつ  
たことか、<sup>ひとけ</sup>人気のない場所にひとり佇んで、君の  
ことを思い、悲嘆に暮れ全き愛に心打ち顛えた  
ことが。幾度、私は希ったことか！ 昔、父の  
呪いは超自然の力を持ち、完徹成就せずには措  
かぬ運命的必然性を帯びて、その目指す目的を  
追求すると信じられていたというが——感謝の  
念に耐え兼ねて心に満ち溢れる祝福にも、同じ  
ような特権的力がありますようにと。君を祝福  
したいと念じるこの心に天から力が授けられ、  
君の跡を追い——君に纏い付き——君を待ち伏  
せ——君に追い付き——<sup>ただなか</sup>倫敦の娼家の暗闇の  
直中、いや（出来ることなら）、墓穴の暗闇ま  
でも君を追い求め——そこで、平和と赦しと終  
の浄罪を告げる正真正銘の神の御墨付きを伝え  
て、君の無明の眠りを覚ますことが出来たらと、  
幾度、私は希ったことか！（ド・クインシー、  
1995, p. 39）

ここでド・クインシーは、明確な根拠のようなものを  
何ら提出しないまま、アンが「無明の眠り」について  
いるなどと想定している。「君の跡を追い——君に纏  
い付き——君を待ち伏せ——君に追い付き」というく  
だりは、ワーズワスの「彼女は喜びの幻だった」10行  
目からの転用であるが、これが「父の呪い」の「超自  
然の力」の描写となっていることからすると、まるで

追い詰めて震え上がらせることが、最高の愛の証しで  
あるというような男性ストーカーの心理描写のようにも  
読めてしまう。そのいっぽうで、ド・クインシーは、  
ここで「父の呪い」という奇妙なペルソナをまとって  
までも、アンに逢いたいと願っている。ここでの彼の  
豹変ぶりは、巧妙なカモフラージュのようなものだろ  
う。秩序のなかに紛れ込み、わずかの間だけでもその  
まなざしから姿をくらしたいと必死に考えているよ  
うだ。

## 7. おわりに ——「告白」という義務——

さいごに、別れたアンを偲ぶ、べつの一節を読んで  
みよう。

先程、私は希望に燃えて彼女を捜したと言っ  
た。数年の間はまさにそうだった。が、今は彼  
女にあうのが怖い。別れの時に私を悲しませた  
あの咳が、今では私のせめてもの慰めである。  
もはや彼女に会いたいとは思わない。彼女は墓  
に葬られて久しいと思う方が、いっそ私は嬉し  
いのである。この世の冷酷無残がああ無邪気な  
性格を殺したり歪めたりする前に、あるいは残  
忍非道の悪党どもが手がけた破滅の仕事を終了  
して仕舞わぬ先に、悔い改めた娼婦マグダラの  
マリアのように、此の世から召されて、墓の中  
にあったならばと、私は切に望むばかりなので  
ある。（ド・クインシー、1995, p. 55-56）

愛する人が、どうせその愛おいしいところを完全に失っ  
てしまうのならば、そのまえに死んでしまうほうがずつ  
と望ましい——これは、娘が凌辱されるくらいなら、  
いっそのこと純潔のまま死んでしまったほうがよい、  
というような変節を含んでいる。帝国主義者ド・クイ  
ンシーらしい物言いである。

愛する者が汚されたならば、「この世の冷酷無残」  
を糾弾しそうなものであるが、ド・クインシーはここ  
で誰のことも非難していない。そして、まさにそこ  
が重要で、『告白』が〈大文字の他者〉にたいする自  
己弁明であると正しく認識するときにはじめて、これは  
むしろ当然のことだと理解できるのである。ひとの心  
理と行動をほぼ完全に支配する象徴的な秩序を、誰も  
まったくの銜いや甘えなしにほんとうの意味ではなじ

ることはできないからだ。人は純粹無垢なまま生きられない。「残忍非道の悪党どもが手がけた破滅の仕事」は、かならず「完了」することになっているからだ。これを「成熟」と呼ぶか「墮落」とよぶかどうかはひとまずおくとして、ここでド・クインシーは普通の娼婦としてたたかき生きていくことを、はっきりとアンに禁じている。世間がアンを墮落の道に追いやったことをことさらに言い立てるのではなく、むしろアンが死ぬことによってこうした象徴秩序から撤退することを望んでいる。世間という秩序に完全に取込まれてしまう前に、アンをそこから救い出したいと思っている。そして、皮肉なことに、まさにこの身振りこそが、無慈悲な「この世」のはじめたことを、文字通りの意味で完成させてしまうことになるだろう。

こうして、ド・クインシーの啓蒙の書は完結する。「自分の心の潰瘍や傷痕を不躰にも他人の眼前に見せつけるなど、「如何わしい女か山師か詐欺師か」のやることと「相場が決まっている」といいながら、彼は『告白』を語り始めたのであった（ド・クインシー、1995, p. 9）。これらは、自分がいかに権力の眼をのがれ、悪事をやりおおせたかを、悔恨を装いつつも内心嬉々として語ることでできる、ある意味で幸せなひとたちなのである。彼の『告白』はというと、「慇懃なる読者」へと親しげに呼びかけつつも、近代国家英国を真の名宛て人として、自分のもっとも愛するもの、もっとも近いもの、自分にとっていちばんたいせつなものを自らすすんで犠牲に供したことを報告しなければならない。このとき、それが耐え難い悲しみを胸に刻み込んでしまったことをも正直に総括し、また厳しく自己批判しなくてはならない。こうして近代化がイバラの道であることを「告白」するが、ド・クインシーはそれと引き換えに自分が「個人」という存在へと没落していく歴史を残すだろう。

こうして『英吉利阿片服用者の告白』は、自分がどのように自分でなくなったかについて、ある近代の精神がつつみかくさずに再現した負のライフ・ストーリーとしての、極めて権威ある記録となったのだ。

## 参考文献

- Barrell, John. (1991). *The infection of Thomas De Quincey*. New Haven: Yale University Press.
- Butler, Marilyn. (1992). *Romantics, rebels, and reactionaries*. New York: Oxford University Press.
- ド・クインシー, トマス. (1995). 英吉利阿片服用者の告白. (野島秀勝). トマス・ド・クインシー著作集, 第一巻. 国書刊行会.
- Gaull, Marilyn. (1988). *English romanticism: the human context*. New York: W. W. Norton.
- 姜尚中. (2007). 愛国の作法. 朝日新書.
- 柄谷行人. (1980). 日本近代文学の起源. 講談社.
- 黒宮一太. (2007). ネイションとの再会 記憶への帰属. NTT出版.
- Leask, Nigel. (1992). *British Romantic Writers and the east: anxiety of empire*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miller, J. Hillis. (2000). *The disappearance of God: five nineteenth century writers*. Chicago: University of Illinois Press.
- North, Julian. (1997). De Quincey reviewed: Thomas De Quincey's critical reception, 1821-1994. Columbia: Camden House.
- Rzepka, Charles J. (1991). The literature of power and the imperial will: De Quincey's Opium War essays. *South Central Review*, 6: 37-45.
- 佐伯啓思. (2008). 日本の愛国心. NTT出版.
- 佐伯啓思. (1993). 「欲望」と資本主義——終わりなき拡張の論理, (講談社現代新書 1150). 講談社.
- シュミット, カール. (2006). 政治的なものの概念. 未來社.
- ジジェク, スラヴォイ. (2008). ラカンはこう読め! (鈴木晶). 紀伊國屋書店.

## A Record of Modernizing Self: De Quincey's *Confessions*

Hitoshi Hamagawa

### ABSTRACT

Although Thomas De Quincey's *Confessions of an English Opium Eater* was a great success just after its publication in the autumn of 1821, the work seems strangely devoid of the sort of shock value we might expect today from a publication of that genre. It is, for instance, presented in a polite language seemingly addressed to a gentle, modern, educated readership, carefully avoiding any details that might have been considered even remotely scandalous. By referring to the works in the areas of political and philosophical ideas informed by Hannah Arendt and assembled by several eminent Japanese scholars, this paper first examines the historical and philosophical backgrounds of the modern nation of the West in an attempt to highlight two dominant theories for its origins and characteristics. Building on the postcolonial approaches initiated by John Barrell's influential study, which tends to focus on the variety of figures of the economic and political "other," this paper deals with the traumatic process in which the modern subjects come into being as a result of being deprived of their feudal-based, God-given, personal characteristics. Relying on the psychoanalytical philosophy of Slavoj Žižek, this paper argues that De Quincey's readers represent Great Britain itself as an agency of the Lacanian big Other, and through his *Confessions*, De Quincey attempts to offer himself as a faithful modern subject to that powerful authority.